

横浜歌人会 会報 119*

横浜歌人会会報 第119号

目次

- 特集1>> 第24回研究会
講演会「空襲、焼跡幼年の歌」
 - * 02 講演会記録… 講師 歌人・絶叫ミュージシャン 福島泰樹氏

- 特集2>> 文学散歩・即詠歌会
横浜市立金沢動物園
 - * 18 報告… 高橋律子／藤田絹子／野一色容子

 - * 17 会員作品
古谷 円／中村節子／中村泰子／長崎厚子
日向輝子／平賀富美子／福原捷子／深志聖子

 - * 21 会員作品
長谷川静枝／中込カヨ子／半澤敏子／林 静峰
中村規子／日原 環／葉山昌子／原 昌子

 - * 22 会員著書紹介&新入会員自己紹介
会員著書紹介… 綿貫昭三／千田政子
新入会員自己紹介… 鯨井可菜子

 - * 24 編集後記

特集1 第24回研究会

―福島泰樹氏講演会「空襲、焼跡幼年の歌」

[講師] 福島泰樹氏（歌人、絶叫ミュージシャン）
[テーマ] 空襲、焼跡幼年の歌
[日時] 2018年7月29日（日）14:30～16:30
[会場] 横浜市開港記念会館 1号室（横浜市中区）
[主催] 横浜歌人会
[後援] 神奈川新聞社、県立神奈川近代文学館

田村 元…みなさまお待たせいたしました。時間になりましたので、第24回横浜歌人会の研究会を始めます。本日の司会を勤めさせていただきます、田村元と申します。よろしくお願いたします。それでは、最初に、横浜歌人会の吉野裕之代表からご挨拶をお願いいたします。

吉野裕之…横浜歌人会の代表を勤めております吉野でございます。よろしくお願いたします。

今日はお暑いなか、たくさんの方にご参加していただき、どうもありがとうございます。大体、会員の方半分、会員以外の方半分といった感じでしょうか。横浜歌人会ができましたのは昭和四十四年ですので、来年で五十年になります。伝統があるような、意外と短いような、そういった団体です。今紹介がございましたが、研究会は今年で二十四回目になります。当初は講演会を中心とした会でしたが、八年ほど前から、ほかの詩歌の分野の方、アートやデザインの分野の方などをお呼びしてシンポジウムを行ったり、あるいは落語とか、説経節とか、篠笛とか、古典芸能を勉強しな

がら、短歌以外の表現についても勉強してゆこうということ、いろいろな試みをして参りました。また改めて二年ほど前からは文学に戻って参りました。昨年は中野幸一さんに源氏物語の言葉と表現、昨年は岡野弘彦さんに釈迦空と横浜ということでご講演をいただきました。今年は講演会のシリーズの三年目ということ、福島泰樹さんに、「空襲、焼跡幼年の歌」と題しましてご講演をお願いすることになりました。

みなさまに差し上げました案内状に、「「空襲、焼跡幼年の歌」をテーマに、空襲、疎開、焼跡などの記憶から、東日本大震災へ至る思いをお話していただくことになりました。今を生きる確かさは、ひとつひとつの体験を乗り越えた力から生まれていることを、追憶へのまなざしを持ち続ける意味を熱く語っていただけたと思います。」と書いてございます。代表としてこうしてご挨拶を申し上げますが、このあとは一人の参加者として、私も福島さんのお話を楽しみにお聞きしたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします（拍手）。

■つややかな記憶

福島泰樹…ご紹介いただきました福島でございます。僕は最近になって、殊に短歌という詩型が追憶、記憶、そういうものを表出、表現するのにもっとも適した詩型ではないかと思うようになりました。同時に、記憶するというのが、どれほど大切なことであるのか。若い頃は短歌的な感性というものを何かこう、感傷じゃないか、そんなふうに思っていた時期があります。しかし、この歳になってね、いろいろと考えるんです。けれど、感傷というものがどれほど、私たちにとって大切なものか。

一九七五年に、自刃、右動脈を切って死んでいった村上一郎という思想家、文芸評論家がおりました。彼がセンチメンタリズム、これを失くして何の国家か、何の人倫か、こういったことを彼は言ひまして、今改めてそういう言葉を思います。そうしたことを含めて



私たちにとって幸せとは何だろうか、いろいろ思うんですね。

僕は七十五歳だけれどね、あの、酒が大好きです（笑）。朝はそうではないんだけど、昼すぎになると、夕方が楽しみで仕様がななんだな（笑）。だんだん夕方に向かって元気が出てくるわけでありまして（笑）。以前はおおぜいで飲む酒がとっても好きだったんですけど、今はそうではない。ひとりで飲む酒が好きです（笑）。孤独じゃないんだな。つややかな追憶っていうか、おおぜいの人間たちに出会い、そしておおぜいの人間たちと別れてまいりました。今日は、先般刊行された『追憶の風景』（晶文社、二〇一六年）を持ってきましたけれども、これは一〇八人の出会った、そして死んでいった人たちを書いた本であります。「東京新聞」、「中日新聞」に毎週連載して、二年間で一〇八人の人間たちを書きました。でもね、実際はもっともともと、たくさん人間たちに出会い、たくさん人間たちと別れたはずなんです。その別れた人間たちが酒を飲んでいると、つややかに、そして現在形で語りかけてくる。そういう時間というかね、それがとっても幸せであるし、それがまた自分自身の創作、短歌創作というものに結びついてくるようになります。人間が生きてゆくうえでセンチメンタリズム、感傷ということが、どれほど大切なものと改めて思うわけがあります。

今日は、そんなことも含めましてテキストを二つ用意して参りました。他に「福島泰樹短歌絶叫コンサート」のチラシでございます。これは、「曼荼羅」という東京吉祥寺にあるライブハウスで、ここでもう三十三年間、毎月十日コンサートを続けてきました。そこに「死者との共闘！ 死者は死んではいない！」というスローガンを書きましたけれども。死者とは何

なのか。死者とは言葉なんです、彼ら、出会ったおおぜいの人たちが、言葉を残してゆくんです、人は。その言葉をステージで叫ぶことによって、その人たちが現在形で蘇ってまいります。そんな話もしてみたいと思っております。それからもう一つは、「空襲、焼跡幼年の歌」というテキストをつくってまいります。これをもとにして、お話をしてゆきたいと思えます。

■福島は茂吉になれ

短歌絶叫コンサートというのは何なのかと、人によつては短歌なんていうのは絶叫するもんじゃない（笑）、という人たちもいるわけで。ところが、僕の最初の歌集が『バリケード・一九六六年二月』（新星書房、一九六九年）。今日は、学友の大上昌昭が来ておりますけれども、一九六六年に早大で学費学管闘争がありました、それ以後六十年代後半に連綿と続いてゆく、学園闘争の最初でありました。学費値上げが突然決まったんです。当時、早稲田大学は年間授業料が五万円だったんです。まだとても物価が安い時代でありまして、下宿代が畳一枚、千円くらいの時代でした。しかし五万円は大金である。それが一気に倍くらいに上がってしまう。あとは学生会館の管理運営権をめぐって学園闘争が起きました。バリケードを築いて、授業放棄して戦ってゆく、バリ・スト闘争でした。そのなかでいろんな体験をしました。今まで全く出会ったことのない人たちと日々討論をし、学校当局と団交したり。そのなかで日々戦いが先鋭になっていき、ついには機動隊によってバリケードが壊されて、学生が排除されてゆくんです。そんな中で、連帯ということを束の間でしか感じませんでした。

当時、戦後最大の大衆運動、六十年安保闘争があつ

て、その翌々年、一九六二年に早稲田大学に入りました。そこで早稲田短歌会に入り、短歌を書き始めたのです。短歌は、現代文学とは遠いものであったと思っ
ていたんですね、その頃。教科書に載っている、例えば正岡子規の「藤の花ぶさみじかければたみの上にとどかさざりけり」なんて、短ければ届かないのは当たり前で、こんな歌どこがいんだと、当時思っていました。ところが、学生たちが政治と文学とか、実存だとか。そんなことを真剣に短歌を通して書いてゆこうという姿勢に出会って、僕はとてもショックを受けたんです。その頃から短歌を現代文学として書き得るのかと真剣に考え始めました。

それで、第一歌集『バリケード・一九六六年二月』の話になりますけれども、短歌というのは呼びかけ、語りかけの詩型である、それが当時の僕自身の感想です。その歌集は、「樽見、君はいまどうしているのだ」。「樽見」という学友に対して呼びかけるところから始まります。「ぼくたちが上げた狼煙は、日本のカルチェ・ラタンの先かけとして、今日へと問いつつつけているのではないのか。70年国会で会おう!とは、活動家、樽見が……」と。それじゃあ、呼びかけであるのなら実際に呼びかけてみようではないか、そんな思いに駆られて始めたのが、短歌の朗読でした。一九七〇年三月に学友たちやまわりで、『バリケード・一九六六年二月』の出版記念会をしてくれました。その席上で初めて短歌の朗読を試みました。すると、短歌は五秒で終わっちゃうの一首が(笑)。みなさん、自分の歌を読んでみてください。本当にせいぜい長く読んでも十秒もたない。一首五秒で終わってしまうこの詩型をどうやって人に伝達していったらいいのか。それが始まりでした、それでリフレインをしたりとか、いろいろな方法を考えながらするうちに

……。その出版記念会のとき、金子兜太が出席してくれまして、いきなり大声で、「福島は茂吉になれ、斎藤茂吉になる!」と叫んでくれた。そんなことを昨日の竹柏会「心の花」という集まりで俳人の黒田杏子からいわれ、その会場のことを思い出したのですけれども……。その会場、神楽坂の教育会館で初めて朗読をしたんです。いきなり電気を消し、そうしたら、みんなが「停電だ、停電だ」というところに、「樽見、君はいまどうしているのだ……」と語りながら、そのうちにヘルメットの上に明かりが点いて……。それが、僕の短歌の朗読の最初でした。

そうこうしているうちに、「そうだ、短歌は音楽だ」と、自分で朗読してみても気が付くようになりました。実際にベートーヴェンの「熱情」を、まだ小さいカセットがないからリールに吹き込んで。当時、大学などに随分呼ばれて朗読をし、それが絶叫の始まりだったんです。しばらくして龍(佐藤龍一)というミュージシャンと出会いまして、ギターで作曲をしてくれたり、朗読が自分のものになってゆきました。

■尊敬される詩人たち

一九八六年に、初めてブルガリアに呼ばれました。ここでは平和をテーマにした世界の文学者会議が行われ、日本を代表して立松和平、日野啓三、島田雅彦など五名の人たちと一緒に行きました。そこでわかったことは、すぐく詩人たちは尊敬されているんです。日本では詩人たちは尊敬されておられません。ほとんどみんな、作家というのと、みんな小説家だと思ってるよね。近頃、歌人が大分活躍の場をもってきたけど、僕らの学生の頃、歌人という馬鹿にされました。例えば、学生の集会にあって、「全学の学生諸君、早稲田短歌会を代表して熱烈な連帯の合図を送ります」とい

うと、一斉に学生たちが「ナンセンス、ナンセンス」っていうんだな(笑)。なぜ、ナンセンスかというのと、日本の基地から飛び立った軍用機がベトナムに行つてナパーム爆弾を落とし、こういう時代の危機のなかで何をそんなものをやっているんだという冷笑でありました。しかし、現代短歌の内実はそうではなかった。一九六〇年の安保前後を通して前衛短歌運動が高まっている時代で、塚本邦雄、岡井隆、春日井建、寺山修司、こんな人たちによつてすごい前衛作品がつくられていた頃だったんです。しかし一般的には、短歌はそんなふうには思われていなかった。

短歌を朗読する機会がやってきました。初めて世界のステージに立つたんです。ブルガリアのソフィア宮殿という四千人ぐらい入るような近代設備で、各国代表の五十人の詩人が雛壇に座り、一人三分で、朗読したんだな。みんな世界の詩人たちは上手いです。絶えずリーディングしていますから。それで、僕は彼らとは違ってね、席を蹴つて、司会者が立つてるマイクの前に立つて、そして三分間、叫んだ。そしたら、結局、僕がブルガリア作家会議コンクール詩人賞をいただきました。そのとき嬉しかったのは、言葉とは音であるということを経験した。意味ではない。短歌という音が彼らの心を打ったんです。改めて、短歌は音楽であり、音であるんだなということを痛感しました。

それから、世界の各地へ呼ばれるようになりました。さて、話をブルガリアにもどします。七、八年前だったかな、コロンビアの「メデジン詩祭」に呼ばれました。メデジン市というコロンビアのなかでも特に貧しい市で、平均寿命が二十五歳です。みんなマフィアになつたり、町歩いていると自動小銃を軍隊の人たちが二丁持つて歩いて、警官隊は自動小銃を一丁。いたるところで職務質問をして、商店には必ずガードマ

ンがいて、銃を下している。僕はカメラが好きだからカメラを持っていくと、カメラ持たないでくださいと。そんなところで朗読したんです。驚いたことは、十万人近い人たちが広場の遥か遠くまでいるのです。彼らはそんな貧しい国であるけれども、自国の詩人たちに對してすごい誇りを持っておりました。つまり、詩とすることは救済、人を慰める、限りなく慰めてくれるもの。そういうふうには感じているんですね。シルバという国民詩人がいまして、どんな貧しい、教養のない人たちも、その詩人の詩を暗唱するんです。

その日からコロンビアの新聞の一面に、二日間に渡って写真が出て、コロンビア各地に呼ばれ、絶叫しました。どこへ行つても、マイスター、マイスターと呼ばれて。だから詩を朗読することが、どれほど大切なことかということをも、改めて気が付いたので。

■民族の誇り

一番、面白かったのは、インドのネール大学に呼ばれた時です。この大学は広大な施設のなかにあります。入口でバスに乗らないと校舎に行けないように大きくて森に囲まれ、犬が放し飼いになっている。それでね、孔雀がいるんです。孔雀がいるところには、必ずコブラがいるんです。孔雀がコブラを……、コブラが孔雀を食べるんです（えー）、いや逆なんです。孔雀がコブラを食べるんです（えー）。そんなところで、講演をやった。日本から一緒に行ったミュージシャンが、「あの、すいません、ピアノを見せてください」と言ったら、そしたらね、ピアノが……ないんですよ、ネール大学に。「あつ、お持ちにならなかったんですか」って（笑）。本当に言ったの（笑）。いかにインド人たちが自国の文化に對して、すごく誇りをもって

いるか。それからさらに、ドラム、パーカッションの石塚俊明が、「それじゃあ、ドラムを見せてください」と、「お持ちにならなかったのですか」（笑）。ところがもう一人、菊池雅志という尺八の名手。彼は自分で持つて来ていますからね。彼だけがニンマリしておりました。翌日結局、彼らも責任を感じまして、オールドデリー、ニューデリー、二つの町を一生懸命駆けずり回って、ピアノを……、ところがレンタルできないのです。年間、一年間だとレンタルできる。結局、古道具屋で子供のピアノを（笑）、おもちゃのが売っていましたので、それを手に入れて。それからドラムはないので、薬缶とかいろいろなものも並べて（笑）。でもね、結構面白いコンサートになった。

■金属のプレート

これまでにアメリカ政府に呼ばれたり、フランスに行ったりと、いろいろやってきましたけれども、去年はベルリンに呼ばれました。ここで大切な、体験をしてきました。ベルリンではね、戦後、東西に分けられてしまった不幸な国なんです。ところが逸早く復興して、ついにベルリンの壁をみずから突き破り……。ベルリンに森鷗外記念館がありまして、その副館長のベネットさんが僕よりも日本語が達者な人（笑）。しかも古典的な教養があつて、すごく勉強している人たちなのです。その人が通訳や案内をしてくれました。絶叫や公開講座などもやりまして、大変感銘を受けたといってくれました。すべてが終わった後に、その副館長さんが是非ご案内したいところがありますと

いうんだな。それで、ホロコースト記念館へ行きまして。ホロコーストとは大虐殺という意味で、ナチスドイツがどれほどおぞましいユダヤ人を虐殺したか。そういうことをドイツ人が今現在、忘れようとしていないのです。驚きました。ブランデンブルク門という、ベルリンで一番中心的な場所があります。そこから、二、三百メートルしか離れていないところに、棺箱ひつぎが、コンクリートで出来ているんですよ。同じ大きさで、人間がすっぽり入れるくらいの。広大な広場に二〇一七体の棺が、いろんな形で、いろんな向きに置かれている。これを見て、僕は圧倒されました。つまり、ポーランド、クロアチア……、ドイツ以外の場所にも収容所をつくり、虐殺してきた。それを自分たちが忘れないためにこういうものをつくれたのです。

それから、ベルリンの北へ四十キロ行ったところに、ザクセンハウゼン収容所という、そこに総監本部



が置かれ、それがそのまま残されており。鉄条網、

それから見張台、もちろん電気は通っておりませんけれども。そして拷問の器具、処刑する器具。囚人たちが描いた絵画。もっと驚いたのは、その宿舍のなかに、虐殺される前まで録音された声が残っているんです。つまり、高名な学者、物理学者、詩人、そういう人たちに、いろんな記録だけを録ろうとしてしゃべらせて、そして最後にズドンという音が入っている。

死の間際でも録った。その宿舍をそのまま残している。ガス室だとかね、浴室だとか、もうほんとに直視できないようなものを。そして表へ出たら、とってもきれいな、去年の六月でしたから、きれいな青い空に白い雲が流れていてね、爽やかな風が吹いていて。さらに広い館内のなかの、収容所のなかの、銃殺場だとか、火葬場へ歩いていいたら、白い砂地の敷地があるんです。そこに、白い花が咲いていて、風に揺れているんです。僕は「ベネットさん、これは何でこんなに白いんですか」って聞いたら、これは死灰、死の灰。つまり、ここでみんな火葬した人たちの骨をばら撒いた。ばら撒いて捨てたんです。そこに花が咲いているんです。僕は坊主ですから、「そうですか。それなら、ここで、お経を読ませてください」といってね、法華経をあげさせていただきました。

それから、車で帰りました。ベルリンは、九時くらいまでまだ明るいので、ユダヤ人たちの居住跡に連れていってくれました。りっぱな家がたくさん建っておりまして。そして「下を向いてください」と、ベネットさんがいっているので、ふっと下を見ると、金属のプレートがはめ込んであります。そこには、ナチスが連行したユダヤ人の名前と連行した日、虐殺されたその日、ちがはめ込んでありました。これは、実にすごいことなんです。

■何も終わっていない

今、私は、関東大震災を一生懸命に書いております。「現代短歌」という短歌の雑誌に毎月三十首。「大正行進曲」というテーマで大正時代をずっと現在形で書いています。画家や詩人、文人、アナキスト、紡績工、淫売、いろいろな職種、階層の人たちが出てくる物語をつくっています。いいですか、みんな何も終わっていない、何も終わっていないんですよ、実は。過去になんか何もなっていないの。

横浜は、大正十二年九月一日、当時、今の地域の十分の一、人口が四十二万人。そこでですよ、関東大震災で東京よりもひどい被害を受けています。あまり知られていない、相模灘沖でマグニチュード7・9級です。そこでなんと、二万人。四十二万人の人口なかの二万人が焼け死に、地震で死んでいます。同時に、四十二万人の人たちが罹災者になっております。そして横浜大空襲が、昭和二十年の五月二十九日にありました。そのときにB29が五〇七機、P50、P101戦闘機が、一〇八機。六〇〇機以上による焼夷弾爆撃ですよ。爆撃した後は、絨毯爆撃、低空から狙い撃ちするんだな、機関銃で。そういう残酷なことが行われて、横浜市だけで一万人が死んだ。しかし、みなさんそんなこと忘れちゃっているでしょ。ところが、ベルリンの人たちは、そういうことを一切忘れようとしなかった。僕は本当にすごい、つまり、ナチスドイツを、自分たちの犯罪として、後世に語り継ごう、二度とこういうことを起こしてはならない、そういう決意の現われではなかったのではないだろうか。ところが日本はどうか。

僕は、東京大空襲を体験しております。二歳でした。昭和十八年の三月に生まれております。ところが、記憶にありません。その前年に、昭和十九年の三月に母

を失っております。それで祖母が僕をずっと……、おっぱいなんかありませんから、口のなかで咀嚼し、十姉妹じゃないけれど、口移しなんかしながら、たぶん育ててくれたんだと思うんだ。祖母の背中に背負われて、東京大空襲を体験しているんです。一晩で、十万人が焼け死にました。あれは世界に類例のない大虐殺で、逃げる道を防ぐため、ガソリンを四方に撒いておいて、それから焼夷弾を落とす。一晩で十万人ですよ。そして、百万人の人たちが罹災し、東京の四割が一晩で、焼土と化しております。それを僕の幼い体は体験している。

■被災地と蘇った風景

そのあたりのことに関連して、二〇一一年三月の大震災についてのお話を始めたいと思うのですが。大震災の後、見舞いに車で走ったんです。まず水戸に見舞って、水戸はほとんど報道されなかったけれども、全壊した家も随分ありました。それから浜街道へ出まして、海辺へ行っただな。やはり、被災した寺に見舞いに……、そしてらもう、すつぽりと地面に屋根だけの家だとかね、水浸しになっている家、いろんな家があります。それから、瓦礫の山です。僕が体験している瓦礫の山というのは、あの戦後の風景の、瓦礫の山であります。使用できるものは一切なかった、子供の頃の瓦礫は。だから、遊び場だったんだね。瓦だとか石だとか、本当の瓦礫です。ブリキなんかがある、と、みな持ってゆくから何もなかった。ところが、この茨城の瓦礫の山のはほとんどは家具だとか、家電製品。全部使えるもんじゃない。それが水浸しになったので捨ててある。ここに、いろいろな意味での時代的な落差を感じました。

それから、いわきへ、いわきの薄磯という海辺へゆ



会場の横浜市開港記念会館。大正7年の開館から100年が経ちました。

きまして。漁村すべてが流され、壊滅していた。僕は坊さんの姿に着替えましてね、ご供養しました。百数十人の死んだ人たちの……。被災地を歩っているとね、写真や何かがあるんだな。その人たちがもって、死ぬまでもっていたその思い出、夢だとか、というものを含めて、（祈る仕事）こうしたんです。そのあたりからね、僕自身の短歌が変わってきました。どんなふうに変ったか。すなわち、それまで考えもしなかった、つまりその被災地を廻った途端から、戦後の

風景が自分のなかに蘇ってきたんです。自分の戦後の風景。そうか、これを俺が書かなくちゃいけないんだ、と思うようになったのです。そして、いろんなことを思い出してゆきました。

■言葉を覚える以前の記憶

疎開先は、出雲でありました。祖母に連れられて、昭和二十二年五月ぐらい、二歳とちよつと経ったあたりからの記憶が僕にはあります。雨が少し降っているところに、祖母に負ふわれて。そのとき後で聞いたら、高熱を発して隣の村まで医者へ行くので、祖母が負ぶっていつてくれたらしいのですけれども、そのときの記憶……。中原中也という詩人は、それを「名辞以前」と言っています。すなわち言葉を覚える以前の記憶のことです。人間というのは言葉にみんな照らし合わせて、そして記憶を探る、僕のもそのときの記憶、まだ言葉を覚える以前の記憶だから、後から僕は緑の田圃だとか、雨だとか、川だとか、言葉にして、記憶しようとしている。

僕は、祖母が目が悪かったもんですから……。川へ転落しております。そのときの水草だとかね、そんなものを覚えておまして……。それが僕の最初の記憶でありました。だから、最初の記憶は死と直面した記憶だった。

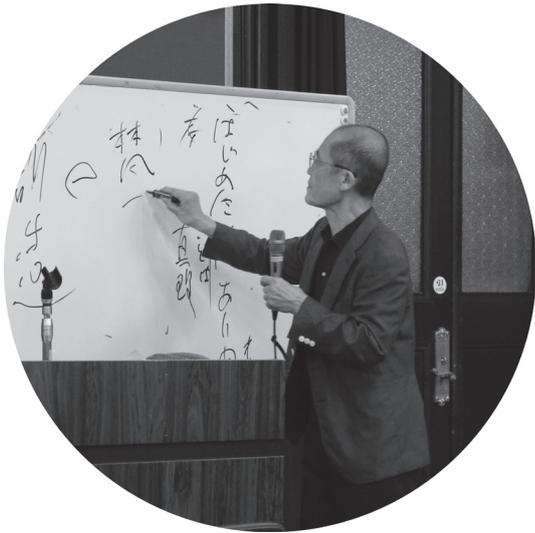
そしてつぎの記憶は、焼跡の記憶であります。手をつながれて東京へ帰ってきて、昭和二十二年の風景であると思います。夏です。母に連れられて、寺が丸焼けになっていますから。母が寺の焼跡へ行って毎日労働をしている。樹木はすべて根こそぎ丸焦げになっている。いかに焼夷弾の威力がすごかったか。そのなかで、僕はコンクリートが剥き出しになっている。そこでね、蠟石……。若い人は蠟石、若い人はいないから

いいけど（笑）。冗談です（笑）。蠟石、みんな知ってますよね（知ってます）。蠟石だと思って、剥き出しのコンクリートにものを書いていたんです。そして母が、泰樹って飛んできて、「それは人様の骨だよ」。僕は、それが生れてものを初めて書いたときの記憶です。人の骨で地べたにものを書いていた。そういうことを思い出して、これはやっぱりね、書かなくちゃいけないんだ、と思うようになりました。

そして生まれたのが、『下谷風煙録』（皓星社、二〇一七年）。去年出しました三十冊目の歌集であります。このところ、毎年一冊ずつ出しております。おそらく現存する歌人のなかで僕が一番歌集を出すことになる。死ぬまで毎年出してゆこうかなと、だから、後三冊ぐらいになるのか（笑）、十冊になるか知らないけども。まあ、そんな思いで『下谷風煙録』を書きました。

■歴史のうち

『焼跡ノ歌』（砂子屋書房、二〇一三年）という歌集を刊行したときに、焼跡を書いたらね、空襲の記憶がないんだよ。ないんだけどね、寺山修司は実際に起こらなかったことも歴史のうちであるといっています。それで、記憶の修正をする。こういうことを寺山修司という人は、自分の方法論にして短歌を書きました。なぜ、こうしたか。彼はすごく悲惨だったの、お母さんに捨てられて。父親は戦争で死んでおります。結局、疎開地の三沢で、母親が米軍基地に働きに行つて、将校と好い仲になって、中学になったばかりの寺山少年を捨てて、九州の芦屋という空軍基地へ行つてしまふんですね。そして、彼は大叔父に育てられることになるんです。そういう不幸な来歴を彼は、修正しなければならなかったんだ。だから、記憶を修正してゆ



く、實際起こらなかったことも歴史のうちであると。みずからの歴史を彼は一生懸命、書こうとした。そして短歌でも書いた。それで、彼はそういう方法論のなかから、こういうことを考えます。多様な私。つまり、短歌というのは、一人称詩型です。我、私、僕。だから、読み手はもちろんみなさんご存知だけど、作品を読むとみんな、何々さんだな、何々が書いたものと思うわけですね。ところが、一人称詩型というものを、寺山修司は自分の体験として逆手に取ります。逆手に取ることによってリアリティを獲得していった。つまり、多様な私を彼は方法にした。

そして、僕は実際に戦争を体験しているんだけど記憶にない、記憶にないことも自分の記憶のうちではないかと、大震災は教えてくれたのだな、と考えるようになります。そうしたことも含めて書かなければいけないと思うようになりました。

■万巻のフィルムの装置

これは余談でありますけれども、僕は三十年くらい前に西武デパートのカルチャーが茨城の学園都市のようなところに開講して、そこで講義を依頼されたんです。茨城は土浦の近くで少年航空隊の基地があったところなんです。その一人が受講生にいて、孫の歌ばかりいつも書いてるんです。ある時、これまで生きてこられて一番忘れられない思い出って何ですかと聞いたら、自分は少年航空隊として航空母艦に乗ったと、自分の学友が腕のなかで死んでいったというのです、重傷を負ってね。なんでそれを、歌に書こうとしないんだっていったんです。とにかく、それを書いてくださいといたら、書いてきました。見たら、過去形で書いているんだよな、過去形で。そうじゃない。あなたは記憶するときに、現在形として記憶してないのかと。みなさん、そうでしょ。どんな古いことでも、思い浮かぶと一瞬のうちに思い浮かんでくるでしょ、現在形で。僕は写真が好きで、自分で焼きますが、真つ暗室のなかでかたて撮った写真を、自分でも忘れてると、そこから姿が浮き出てくるんですね。何ともいえない玄妙の一瞬であります。記憶ってそういうものなんだな。だから、その記憶を今度、現在形で書いてくださいと彼にいたら、彼は現在形で書いてきたの、実に生々しく。それを見て僕はいった。何もあなた終わってないでしょ。つまりその少年は、あなたのなかに生きてるんだと。あなたと共にあなたが死ぬまであなたのなかで生き続けるんだと。あなたが死んでしまつたら、その少年もいなくなってしまうんだと。

山崎方代さんって、みなさんご存知ですか。とても軽妙面白い作品をつくる、鎌倉の小さなお寺の裏に庵をつくって……、生涯放浪の歌人として残っております。山崎方代さんが病気になるまで、こんなことを

話しておりました。僕は死んでしまうと、自分の死に對してはそんなに怖いとは思わない。ただ、残念なことがあると。山崎方代は、戦争に行つて左目を失明して帰ってくるのですけれど。優しいお姉さんがいたんです。その人をいつも思いながら生きていたんです。若く死んでいったと思うのですけれども。僕が死んでしまうと、僕のなかの姉も永遠になくなつてしまふといった。そういうことかと。僕は書かなくちゃいけないと。それが短歌なんじゃないかと思うんですよ。山崎さんは、そういうことをいつているんだなあと思いました。

人間というのは、万巻のフィルムの装置なんです。記憶の装置なんです。何万巻というそのネガを内蔵しているんです。それが人間なんです。死とともにそういう記憶が流されてゆくんですから。でも、生きている間は、その一齣一齣を僕たちは大切にして歌にしていかななくてはならないのではないかと、そんな風に思うわけがあります。

■言葉の牧人

テキストに沿って、僕自身の短歌の方法も含めましてお話ししたいと思います。

『焼跡ノ歌』のところで、これは、東北の被災地に竹む私に空襲の風景が広がっていた。焼跡の風景は、やがて空襲へ広がってゆきました。

まあうしろ識別できぬかなしみの黒くねじれて天を指す腕

自分では見えないけれどね。しかし、僕は体験しております。

灼熱のコンクリートにくつきりと走る裸足のあしあと残る

必死にね、あの空襲のなかをコンクリートがすでに

解けているんですよ。そんなかを裸足で走ってゆく、川に向かつて。そういう足跡がコンクリートに残っていて。

頬は熔け鼻は潰れて叫ばんに唇どこにもみあたらずに
なくに

そして、これが僕自身の、つまり大震災を体験した跡の歌論であります。焼跡には無数の兄、姉、父、そして無数の僕が焼け死んでいた。実際に僕には姉、弟もいません。しかし、僕は焼跡を体験するということはそういうことだと思ふ。そして、こんなふうな歌をつくりました。

さつきまで火に炙られて走った機銃掃射のお
ざかりゆく

火ぶくれになつてふくれた手のかわをぼくの両手
にのこしていった

それから、僕はカルチャーで歌の講座をもつていますけれども、みんな我という言い方しかないんだな。私、僕、俺、もつとくだけでアタシ、アタイなどという言葉を使つていいし。我という言葉だけに収斂させてはいけないんじゃないかと思ひます。

もうこちらへ来てはいけない弟よ 炎の壁よ揺れるをやめよ

骨だけになつてしまった弟よあおくちろちろ燃えるをやめよ

兄さんも姉さんもそして父さんもあおい炎となつて消えゆく

炙られて崩れてあかく丸まつて道に積まれていたつけばくは

ついに僕は死んでしまうのですね。小説だとそういうことは許されるんだよな。主人公が死んでも許されるし。立松和平という僕の親友だった作家は、やはり死んだ後も、僕がこうやって彷徨っている風景だと

か、あるいは、死んだ熊が彷徨つて下界を見ている風景だとか書きました。短歌だつてそういうのを書いたっていいだと思ふんです。要はリアリティーがあるかないかの問題です。

おばかさんだつたけれどもそうでない人と並んで
雨に濡れている

死体とともに焼け死んだ僕が濡れている。そんな歌を書きました。そして、「その頃、叔父英夫はシンガポールに、豊文は奄美沖を漂つていた」、これは実際のことです。実際のことを書くことによつて自分自身にリアリティーをもたせたのだと思ふんです。

空襲警報鳴る束の間を拳手をしてあらわれいでし
叔父のまぼろし

海軍上等機関兵曹叔父英夫巡洋艦「高雄」にあり
て旗振りしかも

放心し空をみあげる父、君にあゝ堂々の輸送船こ
よ

函の中には石くれひとつ恥ずかしく俘虜の日々を
生きた叔父さん

最後まで虚空を掴みそこねてた挫折ばかりの人生
でした

せつなげに灰をかぶつて微笑むは目も鼻もないて
るてる坊主

横穴式防空壕に横たわる黒い骸に吹雪く花あれ
大切に母に抱かれたこのぼくのちんちん罪をつく
つくぼうし

将来、「ちんちん」のこの歌が福島の代表歌として残つたら困るなあと（笑）、思うわけであります。しかしね、そういうような状況をつくりながら自分の現在、それからいろいろなものに変容しながら、「多様な我」をやはりつくつていいのではないか。そういうところに、僕は一人称詩型に多様性と同時に可能

性をもちます。そして空襲というのは絶対的なその一つの事実であるし、その空襲を逆に逆手にとつて、そして自分自身のことをこんなふうに行うたいました。

『空襲ノ歌』（砂子屋書房、二〇一五年）。「昭和十八年三月ボク誕生。昭和十九年三月母死去」、これは実際です。二十六歳でした。僕の母は浅草花川戸で生まれて、二十六歳で死ぬ間に関東大震災がありました。関東大震災では、なんと迷子になっております。一週間後に上野の山で家族と再会しております。その間、下町の親切な人たちが自分の子と同じように水を与えたり、寝床をつくつてくれたりして、そして父母を探してくれたのだと思ひます。そういう一つの関東大震災を体験し、さらに満州事変、二・二六、そして太平洋戦争を、それだけのことを二十六歳で体験して、栄養失調がもとで死んでゆきました。

一年前の三月おなじ病室のおなじベッドで母ゆき
たまう

青くちろちろ燃える母さん上野の山の桜吹雪いて
いますよ

祖母に背負われ声を囁らして泣きじゃくる無差別
銃弾爆撃の夜

その続きにくるのが、「不特定多数の弟、妹、そして不特定多数の姉たち」。これは僕自身の、いわば震災後にできた歌論です。何も自分自身だけの私でなくていいんだ。いろんな場面に私を置いていいんだ。不特定多数の私があったり、姉があったりしていいのではありませんか。群としての私。空襲つてそういうこと、群なんです。一個の、人ひとりとは群のなかのひとつ粒に過ぎないんです。

ぶよぶよの電線なれば縄跳びをしたろうものを弟
いづこ

あおい炎をふきだしている弟のそばに立つてる電

信柱

ああ風は炎となって川わたり身軽になって路地を舐めゆく

泥の川に朝日を浴びてよこたわる白い便器のような妹

妹の白いお尻が、泥のなかにぼっかりと桃のように残っている風景です。それをこんなふう書きました。泥の川に朝日を浴びて横たわる白い便器のような妹。自分でこう書いていて思ったのは、僕は口語と文語、とくに文語の格調を大事にしております、しかし、震災後はそうではなくなりました。僕の口語でもちゃんと格調をもっていますけれども、今の若い人たちは格調ないよな、まったくつまんない。やっぱり練れてないんだな。たくさんつくつてると口語も練れてくる。格調をもつようになると思う。口語でつくつていとわかるようになりました。

枕木が焦っていますわ桜木が真っ赤に燃えて吹雪いていますわ

これは僕自身が姉になっているんです。空襲で焼け死んでいった姉になっているんです。

桜木が燃えていますわまっくらにこげてわたしが揺れていますわ

こういうことも可能なんです、短歌で。鼻も耳も目のくぼみさえみな溶けて花の唇だった姉さん

今度は、僕が姉さんをうたっている。姉さんと応答しているわけです。そのつぎの歌。

桜の枝に引っかかって揺れているでしょうもないネルのズロース

ズロースっていいよなあ。パンティなんて何の詩情も感じない。まあ、こうやって短歌を書いていて楽しいのは、例えばズロースだとか、当時の日常的の、呼

称で歌を書けることができるということ。缶のなかに入っている歯磨き粉、今はなくなってしまうだけれども、そんなものを書くことができるんだなあ。

めくってはいけけないのだよアスファルト母さんぼくの骨どこですか

そして、今度の歌集『下谷風煙録』のなかでは、死んだ母親を再びうたっております。

御徒町大原病院ぼくを生んだ同じベッドで母ゆきたまう

そうなんです、小さな病院ですからね。その病院の前にはガードが走っております、窓辺に山手線が絶えず往き来しております。だから母は僕を電車の音を聞きながら、電車が擦過する音を聞きながら僕を産み、そして電車が遠く過ぎてゆき音を聞きながら二十六歳の命を閉じたと思うんです。そんな思いが僕の学生時代に、

二日酔いの無念極まるぼくのためもつと電車よまじめに走れ

電車に対して限らない……懐かしさを、エレジーを感じるんです。

御徒町のガードの上をゆく雲の リヤカーあわれ 柩車来たらず

戦時中ですからね、もはや霊柩車なんかはない。ガソリンは飛行機に積まなくちゃならない。だからみんな大八車だとか、リヤカー、そんなもののおそらく、母は棺に乗せられて行ったのではないか。そんなことを想像して書く。想像とは、創造することです。何を想像し、創造するかなのです。現代短歌の一番大きい力は想像力です。僕はこれだけのことを体験していない、見てもいない。だけど、見ているんです。その後、たくさん写真を見たり、親たちの空襲中の伝聞で知ったり、だからそれはのちの自分の体験です。のち

の体験を今度は原体験として、自分自身の体験として短歌では書き得る。というのは、短歌は一番、そういうことがリアルに書き得る、記憶装置なんです。短歌だからこそ、こういうことが書き得るんです。もちろん、小説でも書ける、でも小説は小説です。だけど短歌は即座に、そういうことを自身の体験としてリアルに書くことができる。時間、過去と現在と未来、そんなものもひとまとめにして、自分自身の体のなかに引き寄せて、うたつていいのではないのか。そんなふう

に思うようになりました。

リヤカーに載せられてゆく蹤いてゆく未婚の叔母に抱かれてほくも

これ、たぶんそうだと思います。当時、まだ未婚の叔母がつる子おぼさんでしたけれども、たぶん僕は叔母さんに抱かれながら、その三河島の火葬場へついで行ったと思う。

いないないばあその先、三河島火葬場貧しく桜は咲けり

春ですからね、桜は咲いていたんじゃないか、ま、そんなことを。追憶は雲とやなりてなやましく漂う霧の彼方よりくる

そうなんです。これは『下谷風煙録』の歌でありまして、実に追憶は悩ましいです。そして豊かです。

瓢箪池の屋台灯りていたりけり風に白衣の 傷痕 軍人

こういうふうに僕は幼年時代に見てきた。今、もう傷痕軍人はさすがにいません。七十年代の前半ぐらいまでは、傷痕軍人がたくさんいました。まだ、四十年代でしたかね、彼らは。これ、みんな現在形で書いてお

ります。

目をつむればみなもに浮かび漂える夕日のなかの

赤いサンダル

姉が生きていたらというふうな思いです。

その窓のむこうに映る人々や死はやわらかく溶けて廻れり

死がとつても懐かしいものに、自分のなかに思えるようになって参りました。今までは、こんなふうにつくれなかった。うたえるようになった。年を取つてくるということは、豊かになることなんです。素晴らしきことなんです。それだけの体験、記憶が体のなかに、悲しみがそれだけあるということなんです。だから、年を取つてきて、歌はどんどん豊かにならなくちゃあいけない。若いうちが一番じゃないだよね。どんどんどんどん歌は伸びていかなくちやいけないと僕は思っております。今、これが伸びてんのか、お前の歌はそれで……。といわれたら、それは申し訳ないというしかないかもしれません。

追憶は白い手袋ふつていた雲に濡れたガラス窓から

いいでしょ、ふふふ……(笑)。

灰色のインバネス着て中折を真深く被り立ち去りにけり

こんな歌をね。それからこれは自分自身の今の……、僕はね、ボクシングジムに今も通っています。

ジムの鏡に映るこの俺老いらくの 殴つてやろう死ぬのはまだか

ジムの鏡にね、自分の老いた僕が映っている。そしてその自分を殴つてやろう、死ぬのはまだかという歌で。それからつぎの歌。これが今の僕自身の心境でもあります。

羊水と湯灌のみずのやわらかく蕩けるように死は やつてこよ

羊水つていうのはお腹の水だなあ、湯灌の水つてい

うのは自分の死に、骸を洗つてくれる水であります。蕩けるような死を迎えたいですね。

この俺の在所を問わば御徒町のガードに点る赤い 灯である

僕自身のそれが、出生の、それから根拠であります。母が、ここで僕が生まれ、そして母はここで死んでゆきました。ま、こんな歌を『下谷風煙録』という歌集のなかに込めました。その跋にこんなふうに書きました。「焼跡が私の中で鮮烈に蘇つていったのは、被災直後の陸前浜街道を走り、町や村を襲った津波の惨状を目の当たりにした時であった。空地に積まれた水浸しの瓦礫の山に、幼年時代の風景が広がっていったのである」「死者は死んではいない」。死者は、死んではいないんです。私たちが会った人たちはみんな私たちの心のなかで生きている。それを歌にしていく。それが、僕の今、現在であります。そして、その人たちのことを、このステージで再現する。それが僕自身の仕事であると思っております。死者たち、幼い死者たちが紡いでいた夢の記憶の再生。「死者たちが紡いできた記憶と夢の再生！ 歌がそれを可能にするのだ」。これが僕自身の、『下谷風煙録』のあとがきであります。

それから、『追憶の風景』という本のなかに「記憶というものは、いかに進化した映像機器よりも霊妙な力を兼ね備えている」。そうですね、どんなすぐれた機械でも一気にそれを現在に呼び出すことはできない。「二歳の記憶を一瞬のうちに呼び起こし再生することができるとだ。それも、目ばかりの記憶ではない。耳や手や肌の記憶も、人間という記憶装置は具備しているのである。」「過去」や「感傷」と笑つてはいけない。思い出こそが、人生という時間の中で日々生み出され、蓄積されてゆく財産にはかならないのだ。

東北地方を襲った大震災は、そのことを改めて思い起こさせてくれた」。

それから、僕は最後に、言葉とは何なのか、そのことを言いたいです。新約聖書の訳には、はじめに、「神」だとかあるいは「真理」だとか書いてある。「初めに言ありき、言は神とともにあり、言は神なりき」。そして「真理」に、「ことば」とルビが振つてあるのです。ことばというのは、ことばが真理なんですよ。そして、仏教では、梵音といいますが、これは何か。仏の声です。仏の声を梵音ぼんごんしやうつて。だから、お経は仏の声なんです、ね。だから、一字一字が仏なんです。是非そうしたことも含めて言葉とは何なのか。私たちは、言葉にかかわる詩人です。詩人はやはり真理を求めていかなければならない。人間はなぜ生き、なぜ私たちは社会のなかに家族を持ち、人を愛し、歌を書くのか。そのことが一番大切なことではないか。私たちは言葉にかかわる者で、言葉とは真理です、真理にかかわる人々なんです。ハイデッガーという哲学者が、「詩人とは言葉の隣人である」と申しております。あるいは、「牧人である」、つまり言葉を護る人。だから、短歌を作るみなさんは真理に向き合っている。そんなこともひとつ、福島が生意気なことといってあの野郎は、と思わないで、ひとつお考えいただけたらと思うわけあります(拍手)。

「質疑応答」

田村…ありがとうございます。非常に心の深いところに届いてくるような、感動的なお話だったと思います。それでは、会場のみなさんからのご質問の時間をとりたと思いますので、ご質問された方は挙手をお願いいたします。いかがでしょうか。折角の機会です。ので、ご遠慮なく……。ご質問だけでなく、ご感想



という形でもよろしいかと思えます。

会場に王紅花さんはいらっしゃっておりますでしょうか。あ、王さんもよろしければ、ひとことお願いしてよろしいですか。

王紅花…王紅花と申します。結社に入っていないので、個人誌（「夏曆」）を出しているのですけれども。以前から吉野さんと高橋さんとは親しくさせていただきまして、今日、お誘いをいただき、大喜びで出かけて

参りました。お話がもうとても心に染みて、いくつも私のなかで、心を打つことがありました。どうも、ありがとうございました。

福島…王さんは歌人松平修文の、著名な画家でもある松平修文の、夫ではなく妻であります（笑）。

先年十一月二十三日に、松平修文は帰らぬ人となりました。

たまらないなあ、僕のなかに……、王さんのなかに、ずっと松平さんが住み続けるんだと思うし、それがまた王さんの歌になつてゆくのかなあ。松平さんの、以後書き得なかつた歌

を王さんが、書いてゆくのかなあと、僕はそんなふう

に感動しております。よろしくお願いします。

田村…ありがとうございます。ほかにご質問などございますでしょうか。あ、お願いいたします。

永平…私は三十年以上前に、福島先生が一番さきに、あの絶叫コンサートをなさいましたね、札幌で。そのとき参加した者のひとりでございます。

福島…おお。永平…菱川善夫先生の教室にありましたもので。そのときと先生が全然お変わりになってないことに感動いたしました（笑）。

福島…ありがとうございます。永平…どうして、お年を召さないのかな、と（笑）。福島…あの……、歌手でも年取つてくると、下手になつてゆくことがあるけれどね、僕はだんだん若返つていきます（笑）。

永平…先生は、お若く、青春だと思えます（笑）。福島…どうも、ありがとうございます。

福島…ああ、それじゃあ、ちよつとやりましょう。田村…今日はこの後、ライブをしてくださるということで。準備をしてスタートしたいと思います。

「絶叫コンサート」

福島…いつも帽子をかぶつて、それからテラー大上さんが作つてくれた、これ、彼が作つてくれたシャツなんです。ずっと定番になっておまして。これに白いバンドをつけて、黒いズボンと、あとはサングラスをかけますけれども。スポットライトが眩しいんですね。だから、サングラスをつけます。今日は限られた時間のなかで、少し話させていただきたいと思いま

す。

田村…照明、落としてよろしいですか。

福島…お願いします。あたりを暗くします。いい感じですね。さきほど少年航空兵の話を行いましたけれども。戦没していった若い特攻隊員にしろ、みんな最後の最後まで、私記を書きます。人に見せるための私記じゃないんだな。最後まで書いて、それをポケットに入れて、飛び立って……。海辺に漂っていて、海辺に赤いものが漂っているのをアメリカの戦艦の水兵が見つけて、それで、拾つて、そうしたら特攻隊員の私記だったの。それがやがて日本に帰ってくるようになった。そのぐらいね、みんな死の瞬間まで物を書きました。死んでゆくのに何で本を読んだの、ものを書かなくちゃならないのか。最後の最後まで書くという行為は、自己を確認するためなんです。最後の最後まで書いています。今日は八月も近い、お盆も近い、いろんな意味で死者たちがたくさん私たちの周りに来てます。だけど、死者たちの言葉は残っております。聞いてください。

■残した私記―特攻隊員

枝 幹二 富山県出身。早稲田大学、二十二歳。

あんまり緑が美しい

今日これから

死に行くことすら

忘れてしまふそうだ

真つ青な空

ぼかんと浮かぶ白い雲

六月の知覧は

もうセミの声がして
夏を思わせる。

小鳥の声がたのしそう

俺もこんどは

小鳥になるよ

日のある草の上に

ねころんで

杉本がこんなことを云つてゐる

笑はせるな

本日十三時三十五分いよいよ知覧を離陸する。

懐かしの祖国よさらば

使いなれた万年筆をかたみに送ります。

つぎは、相花信夫、宮城県仙台の人であります。十八歳で、彼は富裕な家に生まれております。僕は特高隊員のことを随分調べて本にも書きました。それで、ところがお母さんが早くに死んで、お父さんが芸者さんをお嫁にもらいます。そして芸者さんに育てられます。その彼がいよいよ死にゆくときに、その継母にこんな手紙を書いております。聞いてください。

母上おげんきですか

永い間本当に有難うございました

我六歳のときより育てて下されし母

継母とは言え世の此の種の女にある如き

不祥事は一度もなく

慈しみ育てて下されし母

有難い母 尊い母

俺は幸福だった

遂に最期まで「お母さん」と呼ばざりし俺
幾度か思い切つて呼ばんとしたが
何と意志薄弱な俺だろう

母上お許し下さい

さぞ淋しいかつたでしょう

今こそ大声で呼ばして頂きます

お母さん お母さん お母さん

この手紙を母親は、どんな思いで読んだのかなあと
思うと、たまりません。しかし、こうして言葉がある
んだな。七十三年。こうして言葉はちゃんと生きてお
ります。

つぎは、大石清、大阪の人です。お父さん、お母さんとも小学校の教員であります。そして、阿倍野区の学校が空襲に遭います。そしてお父さん、お母さんは学校を守ろうと思つて焼け死んでしまいます。大石には妹がいる、二人兄弟だったんだな。ところが自分
は特攻隊で飛び立つていかなければならない。彼は静
ちゃんにこんな手紙を書きました。聞いてください。

懐かしい静ちゃん！おわりの時がきました。兄ちゃん
は出げします。

この手紙がとどくころは、沖なわの海に散つていま
す。思いがけない父、母の死で、幼ない静ちゃんを
一人のこしていくのは、とてもかなしいのですが、
ゆるして下さい。

兄ちゃんのかたみとして静ちゃんの名であづけて
いた郵便通帳とハンコ、これは静ちゃんが女学校へ
上るときにつかつて下さい。時計と軍刀も送ります。
これも木下のおじちゃんにたのんで、売ってお
金にかえなさい。兄ちゃんのかたみなどより、これ
からの静ちゃんの人生のほうが大じなのです

もうプロペラがまわっています。さあ、出げきで
す。では兄ちゃんは征きます。泣くなよな静ちゃん。
がんばれ！

こんな折に触れて、ひとつ彼らの残した私記をお読
みいただきたいと思います。

■別離

僕は、中原中也という詩人に学生時代に会いまし
てね。ぱつと開いたページを見たら、「私はその日、
人生に椅子をなくした」って書いてあるんだな。大学
入つて、さあ、これから俺はものを学ぼう、自分の座
るべき椅子をもとう。そう思ったときに、いきなり、
「私はその日、人生に椅子をなくした」って書いてあ
る。それ見てあつと驚いてね。それから彼を貪り読み
ました。深く、悲しみがあるんだな。とっても好きな



んです。とりわけ、伊藤一彦と大上と、みんな同じクラスメートで。伊藤一彦はいろんな、すべての賞をとるぐらいのすごい歌人になりましたが、彼もやっぱり中也や牧水が好きで、よく彼と一緒に朗誦して、純情な学生でありました。「さよならさよなら」ってね。朗誦仕合いながら寝ました。抱き合って寝たわけじゃありませんけれども(笑)。「別離」という中原中也の詩が大好きです。聞いてください。

(音楽)

1

さよなら、さよなら！

いろいろお世話になりました

いろいろお世話になりましたねえ

いろいろお世話になりました

さよなら、さよなら！

こんなに良いお天気の日

お別れしてゆくと思ふとほんとに辛い

こんな良いお天気の日

さようなら 風ふくのべのにしひがしされば冥利につきるころを

(註*)

さよなら、さよなら！

僕、午睡から覚めてみると

みなさん家を空けておいでだった

あの時を妙に思ひ出します

さようなら おのきやまぬ夕暮れをそうそうとして
鞍馬はゆけり

(註*)

さよなら、さよなら！

そして明日の今頃は

長の年月見慣れてる

故郷の土をば見てゐるのです

さようなら 命を賭してなにをしたついに愛せぬ櫃

子の花

(註*)

さよなら、さよなら！

あなたはそんなにパラソルを振る

僕にはあんまり眩しいのです

あなたはそんなにパラソルを振る

さようなら、さようなら！

さようなら、さようなら！

2

僕、午睡から覚めてみると、

みなさん、家を空けておられた

あの時を、妙に、思ひ出します

日向ぼつこをしながらに、

爪摘んだ時のことも思ひ出します、

みんな、みんな、思ひ出します

芝庭のことも、思ひ出します

薄い陽の、物音のない昼下り

あの日、栗を食べたことも、思ひ出します。

干された飯櫃がよく乾き

裏山に、鳥が呑気に啼いてゐた

あゝ、あのときのこと、あのときのこと……

僕はなんでも思ひ出します

僕なんでも思ひ出します

でも、わけて思ひ出すことは

わけても思ひ出すことは……

いいえ、もうもう云へません

決して、それは、云はないでせう

3

忘れがたない、虹と花

忘れがたない、虹と花

虹と花

どこにまぎれてゆくのやら

どこにまぎれてゆくのやら

(そんなこと、考へるの馬鹿)

その手、その脛、その唇の、

いつかは、消えて、ゆくでせう

(妻とおなじことですよ)

あなたは下を、向いてゐる

向いてゐる

さも殊勝らしく向いてゐる

いいえ、かういつたからといって

なにも、怒つてゐるわけではないのです、

怒つてゐるわけではないのです

忘れがたない虹と花、

虹と花、虹と花、

(曇とおんなじことですよ)

4

何か、僕に、食べさせて下さい。

きん、とんでもよい、何でもよい、

何か、僕に食べさせて下さい！

いいえ、これは、僕の無理だ

こんなに、野道を歩いてみながら

野道に、食物、ありはしない。

ありません、ありはしません！

忘れがたない、虹と花

忘れがたない、虹と花

虹と花、虹と花

どこにまぎれてゆくのやら

どこにまぎれてゆくのやら

(曇とおんなじことですよ)

さようなら、

あなたはそんなにバラソルを振る

註*福島泰樹短歌三首。

これは、フランスへ呼ばれたときにね、向こうが
ミュージシャンを連れてゆくお金が出ないっていうの
でね、仕様がなくて作っていったんですよ(笑)、い
ろんな曲をね。それでこの(註・CD)なかに、ミュー
ジシャン連れてゆきました(笑)。

今日はみなさん、天候が悪くて雨で中止になるのか
なあって思ってた、こんないい天気になっちゃいま

して。しかし、また広島の方へ行ってんだってね(註・
台風12号のこと。珍しい進路で西進した)。なんてこつ
たろうね。それでは最後に、いろいろ、ほんとにあり
がとうございました。呼んでいただいて、感謝申し上
げます。

■人生の椅子

詩は、寺山修司。寺修司は、ファイティング原田の
熱烈なファンで、この詩は原田に捧げた詩でありま
す。ところが、寺山修司全集のなかにも載っておりま
せん。僕はファイティング原田から何度も聞いて、あ
まりにいいんでね。何度も書き写して、電話で聞いた
りしながら、そして覚えて朗読をしていたら、三上
寛っていう、フォークシンガーが聞いてて、勝手に録
音しやがって、今歌っているよ。変な節つけやがって
よ(笑)。まあまあ、それはいいんですけども。「戦
士の休息」。そして、中原中也の詩、それから、短歌
は福島です。

人生の椅子

ふりむけば

いまも喝采がきこえる

戦っている自分が見える

ふりむけば

心臓にこだまする汽笛がきこえる

家を出た日の夜明けが見える

ふりむけば

ほつれ髪の女が見える

鉄路に叩きつけたウイスキーの空壇

挫折もあったし
まわり道もあったのだ

ふりむけば

包帯にじんだ血をじっと見つめている

四回戦ボーイが見える

人生に

たった一つの椅子をさがして
さまよってきた俺が見える

ふりむくな

ふりむくな

男のうしろにあるのは

いつも荒野ばかりだ

俺が捨てた栄光のベルトにむらがる

飢えた彼らの雄叫びに



耳をふさごう

人生は終りのないロードワーク
何一つ終ったわけじゃないのさ

さらば 友よ

幾時代かがあります

茶色い戦争ありました

幾時代かがあります

冬は疾風吹きました

さなり十年、そして十年ゆやみよん

咽喉のほかに鳴るものも無き

はれて十五年そして十年ゆあみよん

飲み物もない食べ物もない

これが私の故里だ

さやかに風も吹いている

心置なく泣かれよと

年増婦の低い声もする

あゝ おまへはなにをして来たのだと……

吹き来る風が私、云ふ

港の市の秋の日は、

大人しい発狂。

私はその日人生に、

椅子を失くした。

ゆよーん ゆよーん ゆやゆよん

戦士の休息

福島…どうもありがとうございました(拍手)。最後に読んだ詩(港市の秋)は、中原中也が横浜で作った詩なんです。「私はその日 人生に、椅子を失くした」。横浜をうたった詩であります。

サーカス

田村…ありがとうございます。あらためて盛大な拍手をお願いいたします(拍手)。
それでは、真鍋正男副代表から閉会の挨拶をお願いいたします。

*

真鍋正男…遠路はるばる横浜までお運びくださいまして、ほんとにありがとうございます。もう、すごいお話ばかりで、私は他所から来た者ですから、横浜に住んで四十年ですけれども、横浜大空襲の話も震災の話も、初めて伺ったような次第で、本当にそういう町なんだというのを改めて考えてみなければいけないと思いました。また、最後のお言葉に、言葉とは初めに神があるというような、あるいは仏教のお話も、なにかすごく深いところで、自分の作歌態度やこれからについていろんな考えるべき、示唆を与えてくださったと思います。どうぞ、お身体をご自愛いただいて、益々ご活躍いただければと思います。本当にありがとうございました(拍手)。

以上をもちまして、研究会を閉じさせていただきます。どうかみなさま、お家に帰るまでが研究会でございますので、熱中症には注意しながら、どうぞお元気で帰ってください。どうもありがとうございました(拍手)。

寺山修司「戦士の休息」、中原中也「サーカス／婦郷／港市の秋」、*福島泰樹短歌一首。

あとがき

出会う人や物事からだの奥底で受け取って、内の響きに変え、言葉にしてゆく。そんな繊細な言葉をもつ福島泰樹さんに、ご講演をお願いした。

「短歌をうたう／書く」と使い分け、そこに呼びかけ、語りかけ、そして記録するという思いを込める。その役割を担いながら、短歌と向かい続けている。「うなんだな。」の語りかけは、こぼれるような息づきに乗せられてくる。内に噛み締めるような音は、言葉になる前の思いとともに、心に染み渡ってくる。たぶん、私たちの耳に優しく残るのは、そんな息づきに所どころで出会っていたからなのだと思う。

「絶叫」という言葉のもつ激しさではなく、その空気を伝う響きに、福島さんの真の姿が見えてくる。死者に温かいと感じるのは、さやかな存在への慈しみがあるから、死から生への瞬時に手渡された温みを持ち続けているからなのかもしれない。

夏の午後、薄暗くした部屋での朗読。右の頬に、時折、そっと日が差し込んでいた。会場を去りたい参加者ひとりひとりの笑顔が、印象的な会となった。心から、感謝申し上げます。

(高橋みずほ)

■ 会員作品

● 中村泰子

草木さへなき不夜城のコンビナート あまねき光
に闇の濃ゆさよ
天に向き炎となりし不純物わが身にも欲しきフレ
アスタツク
対岸のコンビナートに灯は入りてわれ眠る時子は
働きぬ

● 平賀富美子

群れ咲くはきくざきいちげ 野の花をたづね尋ね
てこの白にあふ
奥入瀬のみどりの中のむらさきのしらねあふひに
弾むわれかも
道の駅の桂月歌碑のそのかなた稜線^{せせん}たをやかに八
甲田の峰

● 古谷円

ホチキスがぼんやり口をあけたまま薄明の部屋に
ひかり帯びゆく
働くはほんのひとつきホチキスがくつろぎなさい
と見せいる背中
歯を見せて背を向けているホチキスは先輩のよう
わが傍らに

● 長崎厚子

香^{かう}を手向け八百年忌の経を聞く実朝の代の計り難
くも
浮かぶなき唐船一隻はるかなり坐像の君は半眼に
して
遠き代の王の遠忌のいやはてに日は照りながら沫
雪のふる

● 福原捷子

朽ちかけし庭の太木に芽をみつけあるじはふつと
背なをまるめる
公園の桜みあぐる人の背をながむる人のうしろす
がたよ
湯豆腐の鍋にうつりし桜花春のかほりをはこびた
りしか

● 中村節子

雨の日の既視感^{デジャヴ}つかのま人型の青あざやかに信号
点る
トラクターの重き車体は田を出でて瞬^{まはて}にふかき轍
をのこす
親しさに数ミリほどのひかへめを忘れずあらむや
さしき人ら

● 日向輝子

ひとひらの月をうかべてながつきの空は湛ふる群
青の色
祖父^{おほぢ}にねだりしサクラクレパスの群青の色さびし
かりけり
折れぬまま箱の底ひに残りたるあの群青色^{ラピスラズリ}は今日
の風の色

● 深志聖子

ヒマラヤの氷河も空に越えて来ぬ月かげに白き僧
院浮かぶ
ネパールに続く高地に月は満ちわが漂泊の思い明
かるむ
砲身を覗かせて行く軍車両印・パ国境近く来たり
ぬ

特集2 文学散歩・即詠歌会 — 横浜市立金沢動物園

〔日時〕 2018年5月20日（日）

〔歌会会場〕 横浜市立金沢動物園（横浜市金沢区）

〔参加者〕 11名

横浜市の南部に位置し、ハイキングコースで繋がる円海山・北鎌倉近郊緑地保全区域やいくつかの市民の森に囲まれた緑豊かな金沢自然公園内にあり、世界の希少草食動物を中心に飼育している、そんな金沢動物園で文学散歩です。

●文学散歩・即詠歌会に参加して 高橋律子

五月二十日。横浜の金沢動物園へ文学散歩。その後、即詠歌会へ。この日を楽しみにしていた反面、即詠歌会へ初めて出席するため、その場にて詠めるだろうか—と、心配していました。

他の友人達は、歌ができないと困るから、あらかじめ作っておいた方がいいよ、と言ってくれましたが、結局、実行できず、当日になってしまいました。

当日。青空の下、暑くも寒くもなく、ちょうどよい気候で、園でひとときをすごしました。諸先輩方は、—遊び—と言って楽しんで園内を回り、私も、自然に、草食動物達の愛らしさに心が癒され、先輩方の明るい様子に晴れ晴れとした気持ちになつていきました。

この園は、肉食系の動物がおらず、草食系のみ、ということ。その穏やかな雰囲気も、よかつたのかもしれません。

スマートフォンで写真を撮ったり、愛らしい動物名をメモしたり、なるほど、—遊び—のように楽しい文学散歩です。

昼食を頂いた後、皆、歌を詠み、考えています。私も、数首、作歌しました。他の趣味の会で、—みなさん、よく遊んでください。例えば、海や山へ出かけて

ください。きっと、作品に反映されることと思います。

—と述べた先生がいましたが、真実だと感じました。私においても、歌が自然に生まれていきます。生活において、遊びの要素を持つことがとても大切なのだとわかりました。—家にいても、何もしないで終わってしまうからね—という言葉に共感しました。

即詠歌会は、午後二時から行われました。ユーモア、風、青空、香り、動物などをよく考えて詠まれていて、新参者の私は、感動を覚えます。私の歌は、表現など





ピ（「森の馬」の意）に会えた。日曜日とあって、家族連れの子供たちで賑わっていた。

コアラ（絶滅危惧種）に会いたくて、コアラ舎に向かった。コアラはどこ？ユーカリの木のすぐ上でお昼寝タイム、ユーカリの葉が少し動いただけだった。コアラのえさの新鮮なユーカリの栽培、調達に神経を使うということだ。

カンガルー舎には、数えきれない程のカンガルーがいてとても賑やかだ。跳ね、走りまわる、体を掻く、瞑想する、睦まじい親子等様々な行動、表情にこころが和み離れがたかった。

インドゾウに会うべくユーラシア区への坂の道を上って行った。メスのヨーコは体重3800kg、オスのボンは6000kgだそう。小さな目をまばたかせ、重い足を蹴ることを繰り返していた。

集合時間が近づいたので動物園入口に急いだ。円海山を渡る風に吹かれ、遠く房総の沖を眺め、爽やかな五月の空に歌を詠むことなど忘れていた。

二時より歌会会場、八景コミュニティハウス中研修室に移り、歌会開始。司会は宮下俊博さん。全員が第一評者、第二評者となり、超結社、少人数の歌会は、気張らず考えを述べ合い、とても充実した歌会がもてた。

一面、参加者が少ないのがさびしいと思った。因みに第一回目の「山手界隈、港の見える丘公園」、第三回目の「金沢文庫、称名寺」の文学散歩・即詠歌会の参加者は各三十八名であった。

●書を捨てよ、動物園へ出よう 野一色谷子

今年の吟行会が動物園と知った時は心が弾んだ。金沢動物園の近くに住みながら私は一度しか行ったこと

色々考えて批評して頂き、観察することの大切さを痛感しました。帰宅して、また、その日感じたことを詠んでもみました。

一人で歌を詠んでいるだけでは、みえないことも少しみえた気がします。これまで、仕事を持っているので出席できない機会もありましたが、今回、出席して、本当に実りあり、心に春の明るさを感じました。ありがとうございます。

●金沢自然動物園文学散歩・即詠歌会に参加して

藤田絹子

第八回となる文学散歩・即詠歌会は五月二十日（日）に行われた。五月晴れの吟行日和。京浜急行金沢文庫駅改札口、十時集合、参加者十一名。金沢動物園行きバスに乗り、自然動物園到着。「十二時二十分、動物園入口に集合」を確認し、自由行動となった。

なかよしトンネルを抜けると、アフリカ区、モモイロペリカンに挨拶して、クロサイ、キリンと水の流れに沿ってゆっくりと行く。目が合うほどの近さにオカ

がなかったからだ。それに動物園での吟行は初体験である。五月二十日、この日は湿度も低く爽やかな天候に恵まれた。青々と美しい空には白い雲が浮かび、風が吹き渡り、それだけで書を捨てて外へ出た甲斐があったというものだ。

午前十時に京急金沢文庫駅に集合、山の上の「動物園」まで京急バスで行く。「横浜市の敬老バス」を恐る恐る使ってみたのだが、こそばゆいような変な気持ちである。総勢十一名入園、二時間少々の自由行動の開始だ。まず私は木陰に坐って持参のおにぎりを食べる。その間、園内マップを拡げ、行くルートを決めた。アフリカ区とオセアニア区を見て、ユーラシア区へ足を伸ばしてインドゾウも見よう。

歩き出しながらまた考える。動物園での吟行ともなれば、たいていは動物名を入れなければならないだろう。入れないで詠えるかどうか。それに季節感がなく、は吟行の意味がない。望むらくは詠う動物の一般的な属性以上の独自の観察が欲しいものだ云々。有名歌人がわざわざ一日かけて獣園短歌を連作する程である

[写真]

> m.t. : P18-P20
> Atelier UN : P3-P15





から面白いには違いないのだが……。

久しぶりに動物を見ることは予想以上に面白く、童心に戻れた。シンガポールでサファリパークを見て以来である。なかでもコアラの様子には胸がキュンとなつてしまった。コアラ舎の三匹のうち二匹は睡眠中、もう一匹がしずしずとユーカリの幹を伝つて動く。まさに縫いぐるみだ。見るだに愛おしい。幼児が夢中になるのがよく分かった。敬老パスを持つ老女が他愛ないものである。

オカピのお洒落な縞柄。優美に歩くキリン。その長い睫毛と潤んだ瞳。砂浴びをするインドゾウ。動物がかくも個性的なのであるから、人間も人種の偏見なんぞ愚かなこと、多様性こそ豊かさの根源である、と改めて思う。

歌会では色々勉強になった。青空に映えるユーカリの木肌の白さの観察・鹿の耳の微かな動きを詠う作歌態度・カンガルーの生態と人間の自分を比べる詠い方・梅檀、藤のような季節の植物、この日の風を歌い込む技術等。企画に感謝する次第である。

詠草

・栽培のユーカリの木は六万本偏食獣の愛らしさゆゑ

野一色 谷子

・象に会ひコアラに合ひて何さびし動物園は孫と来るべし

藤田絹子

・大あくびカンガルー君横たはり長い尾つばをだらりと伸ばす

後藤恵市

・白き肌にまとはり揺るるユーカリの葉の眩しかり青空を背に

宮下俊博

・愛犬のごとき瞳をしたカンガルーゆつくり歩み母の所へ

高橋律子

・背をかく仕草どたと坐るさまおやじカンガルーみ

高橋律子

ている我が

稲垣紘一

・おりおりサイは見あぐる梅檀の花紫は香りているや

塚田キヌエ

・オリックスはゲージの中に誇らしく角立てて緑の風を嗅ぎある

田代弥生

・鹿食めば木洩れ日ゆれて静かなる耳はかすかに風を追う

高橋みずほ

・草食類飼はれにれかむ獣園の朝そうとうと風吹き渡る

工藤こずゑ

・藤の花枝垂るる葉蔭に身を潜めオカピはただいまモグモグタイム

真鍋正男



■ 会員作品

● 半澤敏子

娘の逝きし月めぐりきて愛でし花勿忘草は冴え冴えと咲く
枳殻の花散る下で白秋の詩口遊みつつ草を引き居り
木道に人の影無く山からの冷たき風に雉子の声する

● 日原 環

富士くだり箱根に至る原ひろら厚くみどりを敷きてしづもる
わが思ひなべて益なしと目の下の厚きみどりは吸ひてくれたり
あかときの涼しきに取り出す針箱に白き木綿糸あるはたのもし

● 長谷川静枝

鎌倉の谷戸にひっそり花ひらく夾竹桃の深きくれなゐ

● 林 静峰

猛暑日の連なる日々を百日紅さええとして紅深めゆく

● 葉山昌子

春雷の一つとどろき雨止みて雨音も去り清しきひととき

三人の大正生れの姉おもふ夾竹桃の花咲きたれば姉たちの少女時代に読みにしよ少女倶楽部の連載小説

歌会終へ猛暑の街に出で立てば緑陰に涌く蟬の熱唱
午後三時炎暑猛暑の道端にしなやかにや猫じゃらしはも

道の辺にさりげなく咲く露草の紫こぼし細き雨降る
はるかなる記憶は一人のものとなりアンダルシアの野に鱗雲

● 中込力ヨ子

国宝の火焰土器にて煮炊きせし縄文の人故郷のひと

● 中村規子

島流し二回されたる西郷隆盛 ひどき皮膚病に罹りしと聞く

● 原 昌子

「古池やー」口遊みたる主治医なり趣味は短歌と答えし吾に

地下鉄の東銀座出づけたたまし救急車走る三月二十日

温泉質異なる三つの浴場持つ南州館に湯治のため度々西郷さん来しと

六十階の空を映してハルカスのトイレの鏡どこまでも青

救急車消防車走る東銀座サリンも知らず歌舞伎楽しむ

硫黄泉のにごれる温泉にひたりつつ しきりに偲ぶ西郷さんを

疾うになき実家なれども残る鍵 亡き母つけし鈴を鳴らせり

■ 会員著書紹介 & 新入会員自己紹介

■ 会員著書紹介 ―

● 綿貫昭三写真歌集『桜木町界限』

私の手作りの写真歌集は平成二十四年に第一集を発行しましたが、今回第十一集『桜木町界限』を発行することができました。

当初は全国各地を経巡りながらの作品が中心をなしていましたが、今回はそのメとして生まれ育った横浜の町限定の歌集に纏めましたので、ご鑑賞いただければうれしく存じます。

六十四頁の写真の中に百三十六首の歌を詠み込み一冊に纏めました。

「自選十首」

- ・ 犯罪のさはりを聞かせ援けれど無くならざりき俺おれ詐欺は
- ・ 産気づき電車の中で生まれしを聴きてし思ふ厩戸の御子を
- ・ 「ランドマーク」夕暮れ時の迫り来ば運河に映る影惜しむらむ
- ・ のたりのたり大観覧車は回りゆくひとり乗りする侘しき夕べ

・ 聳え立つマリインタワーに見放くれば空と遊べる乱れ雲かな

・ 相愛の同伴ひいていくらし銀杏散り敷く晩秋の道

・ 母親はそのでのひらにモルモット乗せて見せをり自が幼子を

・ いざいざと言葉巧みに誘ひだし「わかな」の鰻妻と
楽しむ

・ 練り言を微笑みながら聴いてやる昨日の話一昨日の話

・ はじかみの新芽匂へる手を水に洗へば母の面影浮かぶ

● 千田政子第二歌集『白い年賀状』

二〇〇一年から二〇一七年までに発表した中から四四〇首を選びほぼ編年体にとめました。第一歌集上梓後この様に長い空白となりましたのは二〇〇九年次姉（八十歳）、二〇一三年夫（七十五歳）、二〇一六年長姉（八十九歳）の永眠と続いたことによります。特に次姉との別れは直前までの十年間に及ぶ介護の生活がございました。次姉は子供もなく夫に先

立たれ一人暮らしでしたので私が世話をするしかなかつたのです。当時元気だった夫の協力なしにはとても乗り切ることはできませんでした。そして二〇一二年春、今度は夫が前立腺癌と診断されて以後二年間の通院と入院をくり返し最後は肺癌となり合併症が多い為ほとんど癌の治療もできずホスピスへの道をたどることになりました。次姉を見送った後に「東日本大震災」を私は横浜「高島屋」の七階で遭遇いたしました。一階へ誘導されて避難民となり真夜中になっても

* 横浜歌人会ホームページのご案内

横浜歌人会のホームページでは、会の紹介や催し物の報告など、いろいろな情報を掲載しています。
また、会報のバックナンバーもダウンロードできます。
URLは次の通りです。ぜひアクセスしてください。
<http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>

不通のままのJR線と京浜急行線の利用者の人達だけがデパートで一夜を明かしたのです。翌朝八時過ぎやつと帰宅、夫も家で無事でした。歌集名『白い年賀状』は第一歌集『白い自転車』と偶然ですが「白い」シリーズになりました。夫の他界から一年が過ぎた二〇一五年元旦の朝、ポストの年賀状を取りにドアを開けたところ庭一面が雪に被われ既に雪は止み大晦日の夜に降ったこととなります。私は瞬時にこれは亡夫からの「白い年賀状」ではないかとその場で生まれた一首から今回の「歌集名」といたしました。

「自選十首」

- ・二時間を乗り継ぎ姉を見舞う時われはゆっくり母親になる
- ・おおらかに〈百舟千舟〉ゆきかいていつか戻りぬ気仙沼港
- ・原点へ戻れとわれに言うようにカラーは咲きぬ背筋をのびし
- ・穀もたぬわれも脱皮をこころみむ自ら変わる他なきときは
- ・自画像を画家は残して逝くならむわれの一首の画像さぐる
- ・車椅子待ち合いロビーに連なりて妻が夫押し夫が妻押す
- ・〈世界に一つだけの花〉と互みに咲かせし恋夫は逝きたりその花を手に
- ・失ってはじめてわかる生きるとは誰かの為に生きていたのだ
- ・昨日まで捨てきれなかつた思い出をシュレッターにかければ総てが五ミリ
- ・元旦の雪は「白い年賀状」新しい一步をあなたに誓う

■新入会員自己紹介——

・鯨井可菜子自己紹介

はじめまして。鯨井可菜子と申します。二〇〇九年に作歌を始め、新聞 等への投稿、同人誌「かぼん」を経て、現在は尾崎左永子主宰の「星座」に所属しています。二〇一三年に第一歌集『タンジブル』（書肆侃侃房）を上梓しました。

出身は福岡県春日市という、福岡市の南に隣接する小さなベッドタウンです。九州大学を卒業後、地元デザイン制作会社で働いていましたが、結婚を機に横浜に越してきて五年になります。

地元でいたころ、飲み会でビールの次に頼むのは決まって芋焼酎でした（男女問わず多くの人がそうなのです）。第一歌集で引用していただく機会の多い歌に、

・しのぶれど色に出でにけるわたくしと飲む焼酎はおいしいですか
『タンジブル』

という一首があるのですが、振り返れば、地元でどんなお酒を飲んでいたかに関係あるのだなと思います。こちらに来てからは芋焼酎より緑茶ハイやレモンサワーを飲むことが増え、野毛ですてきなお店をはしごする楽しみも覚えました。

結婚にあたり住む場所を決めるとき、夫（田村元）が団地を三つほど選んできて、その中の一つを選んだ結果、思いがけず横浜市民になりました。そうして暮らすようになった土地に少しずつ慣れてゆき、いまは都内の出版社に務めています。帰ってくるときに多摩川を越えるとほっとする自分がいます。そしてこのたび、横浜歌人会に入会することになりました。

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

*「横浜歌人会会報」第一〇〇号のご紹介

二〇一一年二月に発行された会報第一〇〇号では、特集として、歌人として長く活躍してこられた岡部桂一郎さんと草柳繁一さんにお話をうかがいました。A4判44ページの充実した一冊です。

会報はホームページからダウンロードができます。
<http://yokohamakkar.coocan.jp/>

「主な内容」

- 特集…インタビュー
- 岡部桂一郎さん…動かざる樹の沈黙―戸塚の谷に根ざして
- 草柳繁一さん…一冊の歌集を携えて―「胡麻よ、ひらけ」とうたいつつ

横浜歌人会会報一〇〇号を迎えて
千々和久幸／塩野崎宏／角宮悦子



編集後記

・本年の文学散歩・即詠歌会は平成30年5月20日に横浜市立金沢動物園にて実施されました。詠草参加は11名でした。

・本年の研究会は平成30年7月29日に横浜開港記念会館にて開催されました。参加者は50名と盛会で福島泰樹氏の講演を聞きました。

・会員の皆様で、歌集を上梓された方は、自選10首と説明文(23字×28行)を左記編集人あてお送りください。会報に掲載させて頂きます。

・会員の皆様で、当会報について、ご意見・ご希望のある方は、左記事務局(編集人)あてご連絡ください。
(K・G)



横浜歌人会会報第一一九号

発行日 二〇一八年十二月二十五日

編集人 後藤 恵市

発行人 吉野 裕之

発行所 横浜歌人会

URL <http://yokohama-kk.art.cocacn.jp/>

振替口座 00230-0-52137 (名義 横浜歌人会)

制作 アトリエ云 / 印刷 啓文社

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。